

[総説・解説]

高校福祉科と福祉職の職業像  
—福祉人材確保に向けた一考察—

田中 秀和<sup>1)</sup>, 立花 直樹<sup>2)</sup>

キーワード：福祉科高等学校，福祉教育，福祉専門職

Welfare Course Senior High School and the Occupation Image of  
the Post of Welfare

—A Study of Find a Future Welfare Talented Person—

Hidekazu Tanaka<sup>1)</sup>, Naoki Tachibana<sup>2)</sup>

Abstract

Recently, in our country, welfare education to relate to senior citizens is regarded as important, and it is placed in the one of the education subjects. And it was added for the promotion of the high school educational reform of Ministry of Education while ability, interest, the course of the student diversified. Each school enlarge width of the choice of the learning as much as possible to increase each person's personality to the maximum in each school, and the making of school where there are various characteristics can be promoted. As one of the result, "welfare course" Senior High School setting "the welfare" as a subject increases. In addition, the opportunities when in recent years the post of welfare is taken up in the various media increase. This gives big influence to a high school student performing future occupation choice. Because like this, I looked back on the history of the senior high school welfare department by this report and arranged it how the media took up post of welfare. In addition, I did not only clarify the occupation image to find a future welfare talented person but also spoke that the understanding of the senior high school teachers such as a welfare subject charge teacher, the vocational counseling teacher was necessary. Besides, the teaching materials development that was able to include audiovisual materials conveyed the occupation image of the post of welfare precisely by a high school student enunciated with necessity to aim at the substantiality more than a thing of welfare education.

Keywords : welfare course senior high school, welfare education, welfare professional

---

1) 学校法人 国際総合学園 国際こども・福祉カレッジ 2) 関西福祉科学大学 社会福祉学部

[連絡先] 田中 秀和、立花 直樹  
〒951-8164 新潟県新潟市中央区関屋昭和町2-84-201  
TEL : 025-378-5176  
E-mail : tanaka.hidekazu@nsg.gr.jp

## 要旨

近年我が国では、高齢者等に関する福祉教育が重要視され、教育科目のひとつに位置づけられている。そして、生徒の能力・関心・進路等が多様化する中、福祉教育は文部科学省の高等学校教育改革の推進に加えられた。各学校では一人ひとりの個性を最大限に伸ばすために、学習の選択の幅をできる限り拡大し、多様な特色ある学校づくりが進められている。その成果のひとつとして、「福祉」を教科として設定している福祉科高等学校が増加している。

また、福祉職は近年様々なメディアで取り上げられる機会が増加している。このことは、将来の職業選択を行う高校生にも大きな影響を及ぼす。

このようなことから、本稿では高校福祉科の歴史を振り返るとともに、メディアが福祉職をどのように取り上げているかについて整理を行った。また、将来の福祉人材を確保するためには、その職業像を明らかにするだけでなく、福祉科目担当教員、進路指導教員等の高校教師の理解も必要であることを述べた。さらには、福祉職の職業像を高校生に的確に伝えられる視聴覚教材等を含めた教材開発など、福祉教育のより一層の充実を目指す必要性を論述した。

## I はじめに

近年我が国では、高齢化が進行し、高齢者の増加とともに要介護高齢者も増加している<sup>1)</sup>。要介護高齢者の増加に伴い、特別養護老人ホームや介護サービス施設・事業所等も増加しており<sup>2)</sup>、介護職員の需要が高まっている。しかしながら、介護労働実態調査(2010)によると、ここ数年は政府が介護職員の処遇改善に力を入れた効果で改善傾向にあったが、「職員が不足している」とする介護事業所は50.3%と過半数に上り、前年度より3.5%増加し、1年間に辞めた人の割合を示す離職率は17.8%で、3年ぶりに悪化した<sup>3)</sup>。介護職員の慢性的な人材不足が明らかであり、介護人材確保が喫緊の課題となっている。

近年、高齢者等に関する福祉教育が重要視され、教育科目のひとつに位置づけられている。そして、生徒の能力・関心・進路等が多様化する中、文部科学省の高等学校教育改革の推進に加えられた。各学校では一人ひとりの個性を最大限に伸ばすために、学習の選択の幅をできる限り拡大し、多様な特色ある学校づくりが進められている。「福祉」を教科として設定している福祉科高等学校も増加している。福祉科高等学校では、卒業時に訪問介護員資格や介護福祉士の受験資格を付与されるケースが多い。つまり、福祉科高等学校の卒業生にも、介護人材の担い手としての役割を期待されている。近年の社

会福祉は、「措置から契約へ」や「地域福祉の推進」等の言説に象徴されるように、ますます利用者の視点に立った援助や制度構築が求められている。これらの期待に答えるためには、福祉人材の育成は必要不可欠である。本稿ではこのような問題意識のもとで、高校福祉科と福祉職の職業像に焦点を当てて、論考を進める。

## II 高校福祉科とはなにか

では、そもそも福祉科高等学校とは何であろうか。田村は、このことについて、「高校福祉科は多義的であり、論者によって内容が異なることが多いので注意が必要である」と述べている<sup>4)</sup>。田村は高校福祉科について、大きく3種類に分類することが可能であるとし、以下のよう整理している。

- ① 高等学校における福祉に関する「学科」や「コース・系」の名称を指しているもの。
- ② 資格との関連で、1987(昭和62)年に誕生した介護福祉士国家試験受験資格を与えられる高等学校のこと。
- ③ 2003(平成15)年より新たに設けられた教科「福祉」の科目を設置している高等学校のこと。

このように、「高校福祉科」と言っても論者によって意図するところや強調点が異なるので注意が必要である。「高校福祉科」の充実がますます求められている今日、より確かな理論構築を図っていく必要があるであろう。また、高校福祉科は広い概念で捉えると「福祉教育」の範疇に含まれる。渡辺は「福祉教育」を次のように位置づけている<sup>5)</sup>。

「社会福祉についての関心と理解を深め、社会福祉への主体的な参加と協働を促すことを目的とする教育活動の総称。」ここで同氏は、福祉教育を①学校教育における児童・生徒に対する「福祉の心」の教育、②社会教育や社会福祉協議会等における「権利意識と生活課題の解決」の実践教育、③大学や専門学校等における社会福祉従事者のための専門教育に大別している。渡辺の定義からも福祉教育の幅広さを窺い知ることができる。

## III 高校福祉科の歴史

高等学校の福祉科教育は、1985(昭和60)年2月19日の理科教育及び産業教育審議会答申「高等学校における今後の職業教育の在り方について」に遡る。

当時の社会情勢として、高齢化が進行し、日本政府が提唱した「日本型福祉社会」は機能不全に陥りはじめていた。例えば、年老いた親の子どもに対する被扶養意識をみても、1950(昭和25)年には50%以上の親が「子どもに老後の生活を頼るつもりである」と答えているのに対し、1985(昭和60)年には、それが30%を割る数字と

なっており、ここに老親介護規範の揺らぎをみてとることができる<sup>6)</sup>。老親介護規範の揺らぎと同様に、夫婦共働き世帯の数も1980年代は徐々に上昇し始める。このように、1980年代は、「男性＝正社員として雇用され、その収入により家族を支える」「女性＝家族のケアを担当（稼ぎ手である夫の世話・子育て・介護など）」「企業＝正社員の雇用を維持し、企業福祉（年功序列の保障・福利厚生など）を実践する」という三者関係（男性\*女性\*企業）の維持が難しくなり始め、政府は福祉システムの形成に予算を注ぎ込まざるをえなくなりつつあった。

1985（昭和60）年当時はまだ福祉専門職の国家資格は存在せず、福祉職の資格としては、社会福祉主事があったが、それは任用資格であり、高度化する国民の福祉ニーズに十分に答えているとはいえないものであった。

このような背景の中で、上記の答申を踏まえ、より高度化する国民の福祉ニーズに答える人材を育成するため、高校福祉科の設置が目指されたのである。

翌1986（昭和61）年には、静岡県の三島高等学校に家庭科福祉コースが設置され、その後、年を追うごとに毎年、高校福祉科は増加していく。その後、1987（昭和62）年に「社会福祉士及び介護福祉士法」が成立し、介護福祉士国家試験受験資格取得に向けたルートのひとつとして、福祉系高校が位置づけられた。このことにより、同年より介護福祉士受験可能高校の設置が右肩上がりに増加していくことになる<sup>7)</sup>。以下は、「社会福祉士及び介護福祉士法」成立後の介護福祉士受験高校のべ数の推移を表したものである（表1）。

田村は、2007（平成19）年現在で教科「福祉」を教育課程に位置づけている高等学校は、およそ10校に1校に上ることを明らかにしている。これは、毎年確実に高校生に対する福祉教育が確実に充実してきていることを示している。今後は、さらにその拡充を目指すことが社会福祉の発展に寄与するのではないだろうか<sup>8)</sup>。

佐藤は、高校福祉科設立当初の様子を、当時の教育者たちが手探りで授業を行っていたこと、「先進高校福祉科への学校見学においても実習室の写真撮影を拒否される状況にあり先進校と呼ばれる学校においてさえ閉鎖的であった」ことを報告している<sup>9)</sup>。高校福祉科設立当初は該当する教科書もなく、現場教員たちの苦勞した様子

の一端を知ることができる。

また佐藤は、同論文において、「高校福祉科は、介護福祉士受験取得を目指す資格至上主義的な傾向にあることも事実である」と述べ、その現状に警鐘を鳴らしている<sup>10)</sup>。さらに「教科福祉は、偏差値の高い進学校には設置されていない。履修の対象に考えられることもない」現状を嘆いている<sup>11)</sup>。いずれも、今後の高校福祉科を考えていく上で重要な論点であろう。

また、加藤は高校生の福祉意識に関する調査を実施し、その中で「どのような機会から、高齢者・障害者のことを知ることが多いか」について、高校生に対するアンケートの中で確認している。その結果として、『テレビ』や『ラジオ』から、高齢者・障害者に関する情報を得ている」という回答が最も多く、全体の6割を超える対象者が当該項目を選択したとしている<sup>12)</sup>。

上記のことは、メディアが高校生に与える影響の重大性とメディアが適切に福祉職について高校生に伝えていく責任を示していると言える。よって、以下では、福祉職とメディアに関して、福祉職の職業像がどのようにメディアの中で伝達されているのかに関して先行研究の整理を行う。その際、まず高校生自身が将来なりたいと考えている職業を明らかにし、その中での福祉職の位置づけを考える。本稿は高校福祉科に焦点をあてたものであるが、高校生自身の意識を知ることが、高校福祉科の発展や将来の福祉人材確保につながるものであるとの考えから、考察を進めていく。

#### Ⅳ 将来の職業観

では、そもそも現代の高校生は自身の将来に対して、どのような職業観を持っているのだろうか。

ベネッセコーポレーションが2004（平成16）年に、全国の小学4年生から高校2年生（14,841人）を対象に実施した『第1回子ども生活実態基本調査』によると、「高校生のなりたい職業」について、男子では10位以内に「介護福祉士・ホームヘルパー」は入っていなかったが、女子では第9位に「介護福祉士・ホームヘルパー」がランクされていた。決して「介護福祉士・ホームヘルパー」が、非常に希望の高い職業とはいえないが、辛うじて女子生徒で10位以内をキープしていた<sup>13)</sup>。

表1 介護福祉士受験資格取得可能高校のべ数の推移

1987（昭和62）	1990（平成2）	1995（平成7）	2000（平成12）	2005（平成17）	2008（平成20）
3校	16校	54校	131校	191校	213校

出典：田村真広：福祉科に関する研究動向，田村真広・保正友子編：高校福祉科卒業生のライフコース—持続する福祉マインドとキャリア発達，ミネルヴァ書房，p7，2008。

しかしながら、近年、新聞やテレビ等のマスコミは、介護職員の否定的側面（「労働負担」「疲労・怪我」「低賃金」「離職率」）等を中心に報道してきたため、介護現場は「3K労働」といわれ、失業率が高い世の中にあっても就業することを敬遠され、人材不足が中々解消できない状況である。筆者らのヒアリングによると現在、大学・短期大学・専門学校等介護福祉学科や社会福祉学科の教員や職員が、高等学校の進路指導室を訪問しても「大学・短期大学・専門学校の介護福祉学科や社会福祉学科には、一切推薦していない」「希望の生徒があってもできる限り取りやめるように指導している」と平然と断言される状況にある。

ベネッセコーポレーションが2009（平成21）年に実施した『第2回子ども生活実態基本調査』によると、高校生になりたい職業は、男子が上位から学校の先生（4.7%）、公務員（3.6%）、研究者・大学教員（2.7%）、女子が上位から保育士・幼稚園の先生（5.3%）、学校の先生（5.1%）、看護師（4.8%）となっていた<sup>10</sup>。その他、男女とも上位10位までに福祉系の職業は存在しない（表

2）。

まさしく、新聞やテレビ等のメディアの影響を受け、2004年時点の『第1回子ども生活実態基本調査』に比べても、「介護福祉士・ホームヘルパー」の職業希望ランクは低下している。

しかし一方で、保育士や幼稚園教諭は、福祉系の仕事の中で女性の憧れの職業として今日においても強い存在感がある職業である。一方、社会福祉士や介護福祉士はこの調査の中では名前が挙がっておらず、今後よりそれらの社会的地位の向上、専門性の確立等が求められるであろう。

また、近年、小学校・中学校において「福祉教育」が導入され、「高齢者」「障害者」等との交流や触れ合いが実施されている。また、小学校・中学校・高等学校においては、クラブ活動として「ボランティア部」を設置している学校もある。しかしながら、『第1回子ども生活実態基本調査』（2005）・『第2回子ども生活実態基本調査』（2009）の両調査では、小学校の男女児童、中学校の男女生徒のいずれにおいても、将来のなりたい職業の10

表2 高校生のなりたい職業ベスト10

※↑↓は2004年から5つ以上順位が変化した職業

高校生男子				高校生女子			
		%	順位 (2004年)			%	順位 (2004年)
1	学校の先生	4.7	1	1	保育士・幼稚園の先生	5.3	2
2	公務員（学校の先生・警察官などは除く）	3.6	2	2	学校の先生	5.1	1
3	研究者・大学教員	2.7	7	3	看護師	4.8	3
4	医師	2.3	3	4	薬剤師	2.9	4
5↑	コンピュータープログラマー・システムエンジニア	1.7	12	5	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士	2.4	5
6	警察官	1.4	6	6	公務員（学校の先生・警察官などは除く）	2.3	6
6	薬剤師	1.4	5	6	医師	2.3	7
8	芸能人（俳優・声優・お笑いタレントなど）	1.3	11	8	芸能人（俳優・声優・お笑いタレントなど）	1.5	12
9↓	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士	1.1	4	9	栄養士	1.3	8
9	技術者・エンジニア	1.1	8	10	カウンセラー・臨床心理士	1.2	10
9	法律家（弁護士・裁判官・検察官）	1.1	9				

出典：Benesse教育研究開発センター：『第2回子ども生活実態調査 速報値』p143, 2009

位以内に「介護福祉士・ホームヘルパー」は上がってこなかった<sup>15, 16)</sup>。現在、全国的に小学校や中学校で実施されている「福祉教育」や「福祉交流」が、児童や生徒の将来の職業観に大きな影響を与えているとは言い難い状況が浮き彫りとなっている。

## V 福祉職の職業像に関する先行研究

上記の加藤の指摘にもあるように、高校生はメディアからの影響を強く受け、福祉意識を形成している<sup>17)</sup>。また、高校教育の中に「福祉」に関する科目が加わり、介護福祉士受験資格が取得できるコースの開設も進んだことで、高校生が「福祉の仕事」を知る機会が増えたり、高校生の段階から将来の職業像のひとつとして「福祉職」を志向するケースが増加したことから、福祉職の職業像を的確に高校生らに伝える必要性が高まったといえる。では、福祉職の職業像はメディアの中でどのように伝達されているのであろうか。この点に関しては、主にソーシャルワーカーの職業像をめぐる一連の先行研究が存在する。

保正らは、ソーシャルワーカーとして活躍している11名のライフコースを追うことにより、それらの人々がなぜソーシャルワーカーを志すことになったのかを調査している。その中で、ソーシャルワーカーが力量形成を行うきっかけとして、社会福祉実践上の経験、自分にとって意味ある職場への就任、職場内外でのすぐれた人物との出会いなど14の事柄を取り上げ、それらがソーシャルワーカー自身の「皮むける経験」となることを明らかにした。また、対人援助職の専門職として世の中には医師や教師等があるが、それらの職業は、メディアで頻繁に取り上げられることにより、その職業像が世間一般に伝達されているにも関わらず、ソーシャルワーカーがメディアに取り上げられることは、ごく稀で十分な職業像が伝達されていないことを述べている。そのため、中高生などのこれから自身の職業選択を行っていく人々に対してまずはソーシャルワーカーという職業が世の中に存在することをアピールしていく必要がある。保正らは、その著書において、「日本ではまず、ソーシャルワーカー自身の仕事ぶりや生き方、人物像を扱った文献が豊富になることが必要です」と述べている<sup>18)</sup>。このような取り組みが進展することは、高校生の福祉意識に少なからず影響を与えるものと推測できる。

また、上記に関連し、横山は医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマの分析を行い、ソーシャルワーカーの職業像が世間に伝達される意義のひとつとして、「その専門職になることを志望し、養成教育を受けようとする者を確保し、援助の担い手に育てていく上で、進路選択の過渡期にあるティーンエイジャーが目標とする

職業群の中に、当該職種に関する情報が加えられている」ことを述べている<sup>19)</sup>。

また、田中は医療ソーシャルワーカーを描いたノンフィクション番組についての考察を行っている。これは、ティーンエイジャーを主な視聴対象とし、様々なジャンルの職業についての紹介を行う番組を対象とし、ソーシャルワークの専門的視点から検討を加えたものである<sup>20)</sup>。メディアがソーシャルワーカーを含む福祉職を取り上げる機会が増加すれば、高校生を含む若者は、将来、その職業に就くことを望みやすくなるのではないだろうか。

上記のように、ソーシャルワーカーのライフコースを扱った研究やソーシャルワーカーの職業像を取り上げた研究は、近年確実に増加している。

保正らは、上記の11名のソーシャルワーカーライフコース研究に続き、20代・30代のソーシャルワーカーに焦点をあてて、ライフコース研究を行っている。その中で明らかにしたいことのひとつとして、「現任者のみならず、ソーシャルワーカーを目指す学生にとっても、ソーシャルワーカーとしてのモデル像や成長のヴィジョンを示すこと」を挙げている<sup>21)</sup>。一方、杉本らは福祉現場で働く女性21人のライフコース研究を行っている。その中で、ソーシャルワーカーは世間一般ではなじみの薄い仕事であること、ソーシャルワーカーという仕事が「見えにくい仕事」であることを述べている<sup>22)</sup>。そのような状況において、ソーシャルワーカーの職業像を明らかにしていこうとすることは、意義深いことである。

フィクション作品におけるソーシャルワーカー像を取り扱ったものとして、山田の小説『人は、永遠に輝く星になれない』<sup>23)</sup>や、さくらい原作の漫画『MSW相談室、ナツミです』<sup>24)</sup>などがある。これらの作品は、ソーシャルワーカー自身が執筆したものではないが、それぞれにソーシャルワーカーが苦悩しながら活躍する様子が描かれている。フィクション作品に関するソーシャルワーカー像の研究を行った横山は、漫画作品において、ソーシャルワーカーが取り上げられることは中学・高校生などの将来、職業選択を考える若年層にも手にとりやすく、視覚的に様々なプロセスを短時間で読み取ることが可能であるため、福祉職を含む対人援助職の魅力を伝えるには相当の影響があることを述べている<sup>25)</sup>。また、横山は、中学・高校生を含む若年層に対して、当該職業に就くための具体的なプロセスを伝える重要性も同時に述べている<sup>26)</sup>。

これまで述べてきたように、ソーシャルワーカーを含む福祉職は、他の対人援助職に比べて一般の認知度が低いことが予想され、その具体的な職業像も明確ではない。そのため、たとえ、若年者がメディアを通して、将

来の職業選択のひとつとして福祉職を認知したとしても、どのようなプロセスを経ることによってその職に就くことが可能であるのかを正確に読者や視聴者に伝えることができなければ、その効果は半減してしまいかねない。また、このことは決して、メディア側だけに責任があるのではなく、福祉職の専門職団体（日本ソーシャルワーカー協会、日本社会福祉士会等）にも、福祉専門職の養成教育の在り方について、正確に視聴者に伝える義務があるであろう。

## Ⅵ おわりに

本稿において取り上げた内容は、近年の福祉人材確保に関する議論の活性化に貢献するものであると思われる。今後は、高校生に対する意識調査等を通してより研究を深化させたい。また、福祉教育は高校生だけでなく、広く一般市民にもされる必要がある。越智は、福祉アクセシビリティに関する研究の中で、福祉教育の意義を力説している<sup>27)</sup>。今後は、このような先行研究にも学びながら、一般市民に対する福祉教育の在り方についても考察していきたい。また、将来の福祉人材を確保するためには、その職業像に関して、福祉科目担当教員、進路指導教員等の高校教師の理解も必要である。さらには、福祉職の職業像を高校生に的確に伝えられる視聴覚教材等を含めた教材開発など、福祉教育のより一層の充実が望まれる。

## 文献

- 1) 立花直樹：社会福祉施設における特殊浴槽使用の現状と課題，関西福祉科学大学紀要13，p50，2010.
- 2) 立花直樹：社会福祉施設における特殊浴槽使用の現状と課題，関西福祉科学大学紀要13，p51，2010.
- 3) 「介護施設半数「人手不足」離職率3年ぶり悪化昨年度」朝日新聞，2011年8月24日。  
(<http://www.asahi.com/job/news/TKY201108230684.html> 2011/09/11アクセス)
- 4) 田村真広：高校福祉科教育に関する研究の課題と展望，日本福祉教育ボランティア学習学会年報13，pp10-24，2008.
- 5) 渡辺晴子：福祉教育，山縣文治・柏女霊峰編：社会福祉用語辞典（第8版），ミネルヴァ書房，京都，p316，2010.
- 6) 武川正吾：社会の変化と福祉，社会福祉士養成講座編集委員会編，現代社会と福祉（第2版），中央法規，東京，p24-26，2010.
- 7) 田村真広：福祉科に関する研究動向，田村真広・保正友子編：高校福祉科卒業生のライフコース—持続する福祉マインドとキャリア発達，ミネルヴァ書房，京都，p6-7，2008.
- 8) 田村真広：福祉科に関する研究動向，田村真広・保正友子編：高校福祉科卒業生のライフコース—持続する福祉マインドとキャリア発達，ミネルヴァ書房，京都，p7，2008.
- 9) 佐藤完：高校福祉科の設置と高校生が福祉を学ぶ意味，高田短期大学紀要26：p44，2008.
- 10) 佐藤完：高校福祉科の設置と高校生が福祉を学ぶ意味，高田短期大学紀要26：p47，2008.
- 11) 佐藤完：高校福祉科の設置と高校生が福祉を学ぶ意味，高田短期大学紀要26：p47，2008.
- 12) 加藤聖子：高校生の福祉意識，藤女子大学QOL研究所紀要2（1）：p55-63，2007.
- 13) Benesse教育研究開発センター：『第1回子ども生活実態調査 速報値』p105，2005。  
([http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu\\_data/2005/pdf/1kodomoseikatu\\_data10.pdf](http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2005/pdf/1kodomoseikatu_data10.pdf) 2011/09/11アクセス)
- 14) Benesse教育研究開発センター：『第2回子ども生活実態調査 速報値』p143，2009。  
([http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu\\_data/2009/pdf/data\\_11.pdf](http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/pdf/data_11.pdf) 2011/09/11アクセス)
- 15) Benesse教育研究開発センター：『第1回子ども生活実態調査 速報値』p105，2005。  
([http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu\\_data/2005/pdf/1kodomoseikatu\\_data10.pdf](http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2005/pdf/1kodomoseikatu_data10.pdf) 2011/09/11アクセス)
- 16) Benesse教育研究開発センター：『第2回子ども生活実態調査 速報値』p143，2009。  
([http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu\\_data/2009/pdf/data\\_11.pdf](http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/pdf/data_11.pdf) 2011/09/11アクセス)
- 17) 加藤聖子：高校生の福祉意識，藤女子大学QOL研究所紀要2（1），p56，2007.
- 18) 保正友子，竹沢昌子，鈴木真理子ら：成長するソーシャルワーカー—11人のキャリアと人生，筒井書房，東京，p182，2003.
- 19) 横山豊治：ソーシャルワーカーを描いたフィクション作品に関する一考察—医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマの事例検討—，新潟医療福祉学会誌3（2）：p90，2003.
- 20) 田中秀和：医療ソーシャルワーカーを描いたノンフィクション番組に関する一考察，新潟医療福祉学会誌8（2），pp30-34，2008.
- 21) 保正友子，鈴木真理子，竹沢昌子：キャリアを紡ぐ

- ソーシャルワーカー— 20代・30代の生活史と職業像。筒井書房，東京。p6。2006.
- 22) 杉本貴代栄，須藤八千代編：私はソーシャルワーカー—福祉の現場で働く女性21人の仕事と生活。学陽書房，東京。p3。2004.
- 23) 山田宗樹：人は、永遠に輝く星にはなれない。小学館，東京。2008.
- 24) さくらいもとこ：MSW相談室、ナツミです。角川書店，東京。2008.
- 25) 横山豊治：フィクション作品におけるソーシャルワーカー像の検討— MSWを主人公に描いた4作品を通して，医療ソーシャルワーク研究1(1)，pp24-36。2011.
- 26) 横山豊治：フィクション作品におけるソーシャルワーカー像の検討— MSWを主人公に描いた4作品を通して，医療ソーシャルワーク研究1(1)，p32。2011.
- 27) 越智あゆみ：福祉アクセシビリティ—ソーシャルワーク実践の課題。相川書房，東京。p18，2011.